



シャーロック・ホームズの調査方法論

糸乗 貞喜

(アルパックニュースレター 1988.3)

- 4 コンサルタント論

殺人現場には急いではいらな!

殺人事件の現場、ローリストン・ガーデン3番地に、シャーロック・ホームズがワトスンと一緒に馬車で駆けつけたとき、ホームズは100ヤード余も手前で馬車を止めた。「彼がどうしてもおりようというので、私たちはそれから歩いてゆくことになった。」

この小説はワトスンの独白リポートの形で進むのであるが、「私は、シャーロック・ホームズがすぐ家の中へ駆け込んで、事件の調査を始めるものと思っていた。ところが彼はそんな気配をすこしも見せないのであった。彼は、私などから見るとこの場合としては、気取りすぎていると考えたくなるような冷然たる態度で道路を行ったりきたりすると、地面や空や向かいがわの家並みや、また柵などを、ぼんやりながめはじめた。その観察が終ると、こんどは、家へ通じる小道の、なるだけ緑の草のうえを歩いてゆきながら、その地面に強く眼をそそぐのであった」というところが、この探偵物語のベースとなっている。

探偵と現場監督

このくだりを読んで、思い当たることがあった。それは20年余り前の私の体験である。20年余り以前に、私は小さな建設会社でいろんなことをしていた。そこではもちろん現場監督の仕事もあった。現場に行くには、たいがい自動車を自分で運転していくので、現場の車置場へ入って自分の自動車を降り、それから現場を見てまわったり、職方への指示をしたりすることになる。そうしていたときに注意されたことがあった。

「現場へはすぐ入ってはいかん。ずっと手前でおいて(クルマを)、ゆっくり見ながら近づいていかんと、肝腎なところを見落すぞ」と言われた。たとえクルマで現場へ直接入っても、一旦外へ出て少し離れたところまでもどり、外をゆっくり一回りして現場を見ながら入れ、というわけであっ

た。「緋色の研究」の前記のくだりを読んだとき、このことを思いだしたのである。

方法と方法論

殺人の行われた建物・部屋に入ったあとは、「天才とは無限に労苦しうる能力をいうそうだな」といいながら、床の埃を集めて封筒に入れたり、痕跡と痕跡との間隔をきわめて細心に測ったりする。つまりホームズは、「探偵として必要な調査方法」を立派に身につけている。

しかし、「100ヤード余も手前で馬車をおりる」という態度は、方法の問題ではなく、対象にどのようにせまるか、一対象を調べるための方法についての認識論・考え方を示すものであり、方法論を意味していると思える。このことはドイルが雑誌に「人生の書」という書で、観察と分析について述べていることからわかる。

それらはさておき私にとって意外なのは、これほどしっかりした認識論をもつホームズが、ワトソンの分析によると「哲学の知識ゼロ」とされていることである。ホームズの学力は12項目に整理されているが、極めてアンバランスで、「バイオリンにたくみ」ということが特異な才能としてあがっている。

音楽論と水割りの話

以下は駄足であるが、ホームズが音楽会から帰ってきてワトスンに言う話が面白い。「君は音楽についてダーウィンが言ったことばをおぼえていますか。彼の説によると、音楽をつくりだしたり鑑賞したりする力は、言語能力よりずっと古くから人類にそなわっていたという、ぼくたちが音楽をきいて、いいようなない感動をうけるのは、きっとそのためだろうね。われわれの魂のなかには、世界の幼年期の、霧につつまれたような日々の、おぼろげな思い出が生きているのだ……」「それはまた、すこし漠然とした考え方だな」とワトスンが反発すると、ホームズが「自然を解釈しよう

と思えば、人間の頭も自然ぐらい漫然たるものにならなければならない」という。これも正に音楽鑑賞方法論であると思う。ダーウィンが言ったことばというのが本当だろうかという気はするが。

駄足をもうひとつ。スコットランドヤードきつての機敏な男グレグスンから捜査の状況をホームズが聞くところがあるが、「そこまでの苦心談をぜひ聞かせていただきたいですな、水で割ったウイスキーでもどうぞ」とホームズがいい「けっこうでしょうな」と刑事が応じるくだりがある。

私は、どこやらで小耳にはさんだところによると、「水割」は日本の発明であって、スコッチの本場ではそんなことはしないんだ、ということだったように思う。もちろん今では水割もやるが昔はやらなかったという話であったように思う。ところがこの「緋色の研究」は、1886年に執筆されている。100年以上前にグレグスン刑事が「水割り」を飲んでいる。

以上駄足2点。「ダーウィンの音楽論はコナン・ドイルの創作なのか、ダーウィンの言ったことなのか」と「水割は昔からイギリスで普通の飲み物であったのか」について、ご教示いただきたいものと思います。

* 1月6日がシャーロック・ホームズの誕生日ということで、今年で150才です。

コナン・ドイル著、阿部知二訳、創元推理文庫